

九州アメリカ文学会第 69 回大会プログラム

期 日：2024 年 5 月 18 日（土），19 日（日）

会 場：九州大学伊都キャンパス イーストゾーン A-117 教室
(福岡市西区元岡 744)

<第 1 日目> 5 月 18 日（土）

開会式

13:00-13:10 竹内 勝徳 (鹿児島大学・九州アメリカ文学会会長)

映画上映

13:15-15:40 『グリッド』 (1924)

研究発表

15:45-16:25 毛利 優花 (福岡大学) 司会：永川 とも子 (九州大学)
「Philip K. Dick の短編小説“Stand-By”に見るテクノロジーと政治」

16:30-17:10 大島 由起子 (福岡大学) 司会：竹内 勝徳
「“Norfolk Isle and the Chola Widow”における cholera 性と島の名」

特別講演

17:15-18:15
渡邊 克昭 (大阪大学名誉教授、名古屋外国語大学)
「すべては『関係性』によって繋がっている
——後期デリーロにおける量子論的世界観」
司会 竹内 勝徳

総 会

18:20-18:40

懇親会

19:00-21:00

会場 グローカルホテル糸島
〒819-1111 福岡県糸島市泊 844 番地 1

大会会場から送迎バスで移動します。

参加申し込みは以下の URL より 4 月末日までにお願います。立食形式ではなく、コース料理となりますので、当日の飛び入り参加、直前でのキャンセルは受け付けられませんのでご注意ください。

https://docs.google.com/forms/d/e/1FAIpQLScIfajrnprmi0Xr_0IT8AH57EayHBA0Y1g50nTy0wAYbC5GIA/viewform?usp=sf_link

<第2日目> 5月19日(日)

シンポジウム

10:00-12:00

「アメリカとテクノロジー」

——アメリカ流線型時代の「人間」、「他者」、「テクノロジー」

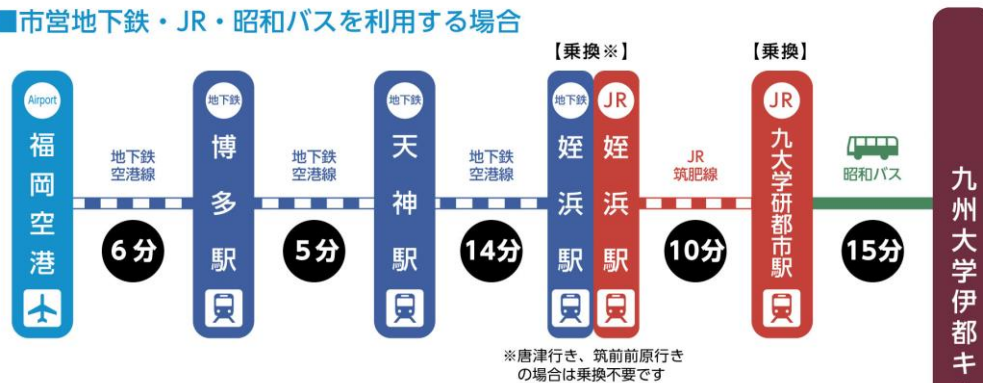
司会・講師 中村 嘉雄 (九州大学)
講師 塚田 幸光 (関西学院大学)
講師 福田安佐子 (国際ファッション専門職大学)
講師 鈴木 章能 (長崎大学)

閉会式

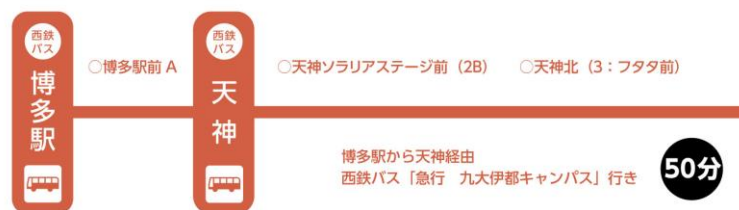
12:10-12:20 竹内 勝徳

交通アクセス

市営地下鉄・JR・昭和バスを利用する場合



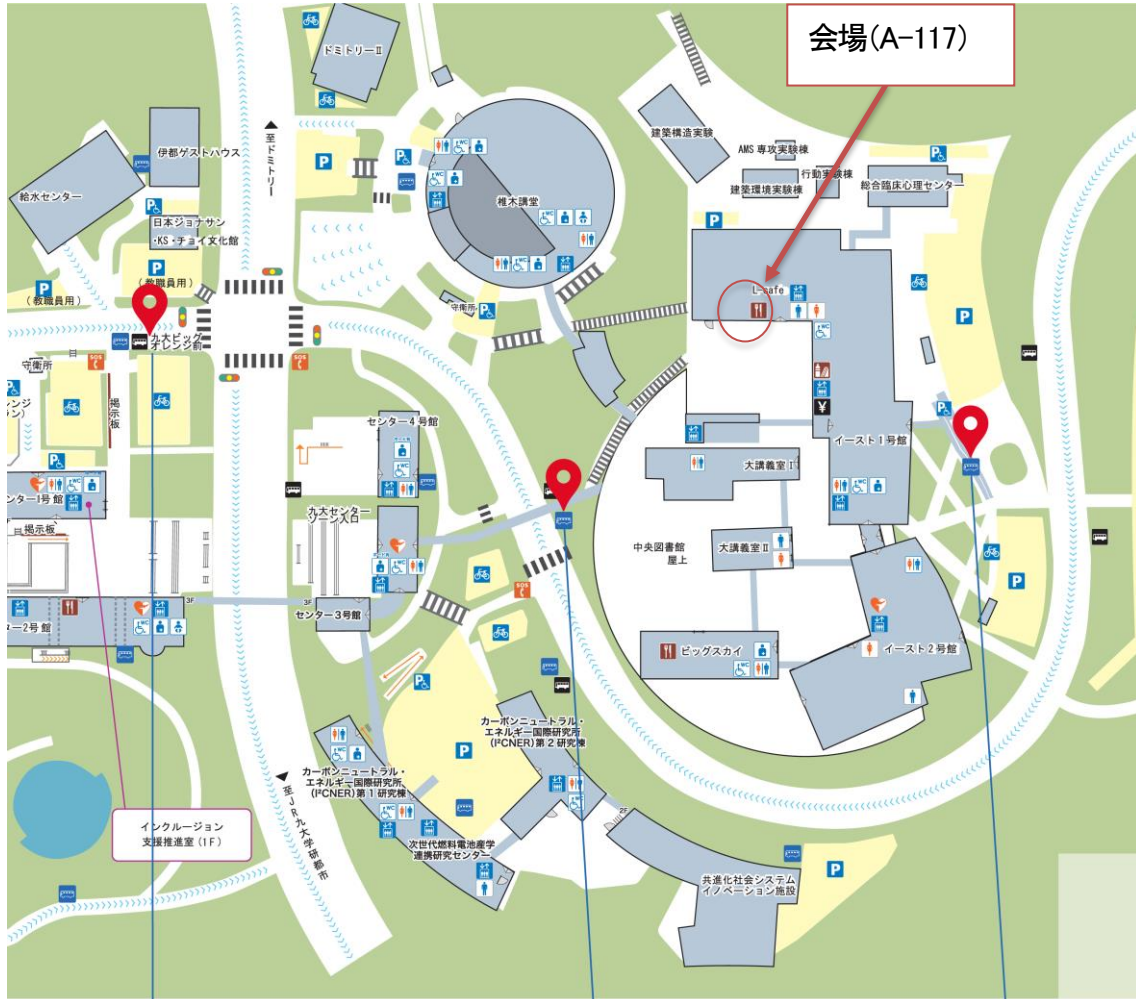
西鉄バスを利用する場合



ホテル案内

- グローカルホテル糸島
大学に最も近いが、やや高価なりリゾートホテル。
 - ホテルAZ 福岡糸島店
JR 糸島高校前駅のすぐ横にあり、1泊朝食付き 4800 円。
 - ホテルニューガイア糸島
JR 前原駅から徒歩3分。普通のビジネスホテル。
- その他、天神、博多のホテルに宿泊しても、大学までは1時間以内で到着できます。

会場案内



ビッグオレンジバス停

中央図書館バス停

イーストゾーンバス停

『グリード』 (Greed)

1899年に出版されたアメリカ自然主義の傑作、フランク・ノリスの『マクティীগ』(McTeague)の映画化作品である。オーストリア生まれのエーリッヒ・フォン・シュトロハイムという怪物的なまでに完全主義者の手にかかって作られた1924年のこの作品には、現在にいたるまで語り継がれる逸話が残っている。フォン・シュトロハイムはノリスのこの作品にあまりに心酔し、持ち前の完全主義で完璧な形で映画化しようと試みた。当時はスタジオ撮影が常識であったが、フォン・シュトロハイムはすべてをロケーションで撮影した。20世紀初頭のサンフランシスコの街並みを完全に再現し、俳優たちをそこで寝泊まりさせて登場人物になりきるよう指導した。また作品最終部の舞台であるビッグ・ディッパー鉱山は、現地に赴き、すでに操業されていなかった設備を再稼働させた。きわめつけはデス・ヴァレーの場面で、夏の盛りに実際にアルカリ砂漠のデス・ヴァレーで撮影を行ったため、撮影スタッフの中には死者まで出たという。

フォン・シュトロハイムは『マクティীগ』に描かれた内容を一字一句まですべて撮影することを目指し、膨大な脚本に基づいて撮影を行った。7か月の撮影期間が終わると、フィルムの特長は44104フィートにおよび、最初の試写の段階でおおよそ9時間あったという。その後映画会社の指示により、自ら約半分の長さにカットすることを余儀なくされるが、それでも上映するには膨大過ぎた。紆余曲折を経たのち、『グリード』はフォン・シュトロハイムの思惑を無視する形で最終的に130分弱にまで削られた。今日われわれが目にするこのバージョンである。

フォン・シュトロハイムはD・W・グリフィス、セシル・B・デミルとともにサイレント映画時代の三大巨匠のひとりと言われ、現在でも熱狂的なファンが多い彼はノリスの創作姿勢をほとんど自分のもののように感じるほど熱烈に信奉しており、その結果が『グリード』製作に向けた執念につながったのだろう。映画会社に無残に切り刻まれる以前の失われたフィルムは、いまだに時折発見されたといううわさが生じるが、今のところそのすべては虚報であることが判明している。

Philip K. Dick の短編小説 “Stand-By” に見るテクノロジーと政治

毛利 優花 (福岡大学)

1963年に発表された Philip K. Dick の短編小説“Stand-By”（『待機員』）では、高度なコンピュータ（ユニセファロン 40D）がアメリカの政治や行政、軍事までも制御している。主人公のマックス・フィッシャーは、失業手当で生活している平凡な男だったが、ある日、ユニセファロン 40D が故障した場合に備える「待機員」に選ばれる。「待機員」の仕事内容はユニセファロン 40D のそばでひたすら控えておくという単純なものはずだったが、エイリアンの奇襲によりユニセファロン 40D は動かなくなってしまう。マックスは、代わりに大統領に就任し、突然の重責を負うこととなる。

多くの Dick 作品において、平凡な男 (an ordinary man) が非現実的な出来事に巻き込まれることが特徴としてあげられるが、この短編小説にもその傾向が表われている。注目するのは、マックスがユニセファロン 40D の代わりに大統領として指揮を取る場面である。人に指示する権限、世界を支配する力、そして敵に対峙するための軍事命令など、あらゆる「支配」が可能になった状態で、Dick が人間の欲望と権力への固執をどのように描くのかを考察する。また、本作ではその全貌があまり詳細に描かれていないユニセファロン 40D の役割についても考えていく。AI の台頭や高度に発展したテクノロジーが不可欠となった現代社会と照らし合わせ、Dick 作品を現代の視点で読み直す意義を模索する。

キーワード

Philip K. Dick, “Stand-By”, politics, computer, technology, control, desire

“Norfolk Isle and the Chola Widow”におけるチヨラ性と島の名

大島由起子 (福岡大学)

Herman Melville 研究では、昨今、Spanish America が注目されている。Melville の短編集 *The Piazza Tales* の、10 篇のスケッチから成る“The Encantadas, or Enchanted Isles”全体については、ガラパゴス諸島という舞台が不毛で無法地帯だと表されているからであろうか、この世の地獄といったイメージばかりが強調されてきた。わけても“The Encantadas”の中の“Norfolk Isle and the Chola Widow”と題された第8スケッチは、水夫たちに襲われた挙句に絶海の孤島に置きざりにされた女性についての物語であるから、読者の心に悲惨さを刻み込まずにはおかない。しかしながらこのスケッチには明るさもあるということ、人は笑うだろうか。

確かに Melville は悲惨さを描くことが多い。だが、たとえば Paul Hurler は *American Terror* で、Melville という作家は、暗い方に傾くものの、物事の両面を見る傾向が強いと指摘している。同感である。“The Encantadas”第2スケッチでも、亀の両面を例に挙げながら、物事の暗さも明るさも見るようにと複眼的視点の大切さを説いている。

“Norfolk Isle and the Chola Widow”ではどうであろうか。語り手は、Hunilla に降りかかった二つの惨事についてはつまびらかにしないでおこうと、次のように沈黙を決め込む。

But no, I will not file this thing complete for scoffing souls to quote, and call it firm proof upon their side. The half shall here remain untold. Those two unnamed events which befell Hunilla on this island let them abide between her and her God. In nature, as in law, it may be libelous to speak some truths.

従来、二つの惨事とは、Hunilla が水夫たちに輪姦されたのが二度だったことを指すとされてきた。しかし “In nature, as in law”であるから、発表では、輪姦に加えていまひとつの惨事があったと前提して、その具体化を試みる。また、Hunilla が民族、ジェンダー、階級面で差別的暴力の対象だったことを考察する。そうやって作品をより暗く解釈した上で、あえて、前後のスケッチや Melville の小説 *White Jacket* を念頭に、タイトルの島名 Norfolk に明るさが隠されている可能性を探りたい。Melville の人種観や理想の男性像との関連から、地獄の中にあっても美しい輝きを放つ作品として “Norfolk Isle and the Chola Widow”を捉え返してみたいのである。

キーワード

“Norfolk Isle and the Chola Widow”, Cholaness, hidden brightness

すべては『関係性』によって繋がっている
——後期デリーロにおける量子論的世界観

渡邊 克昭 (大阪大学名誉教授、名古屋外国語大学)

ドン・デリーロ文学には微粒子が触発する多様な問題系が潜んでいる。*White Noise* (1985)において空媒中毒事件を引き起こす「ナイオディンD」、ナノテク高性能薬物「ダイラー」、*Underworld* (1997)の膨大なテキストに埋もれた微小なスペックとしてのウイニングボールの追求、写真の細部を識別するドット・セオリーなど枚挙にいとまがない。そうした不可視の極小マテリアルへの眼差しが究極的に行き着くところが素粒子の世界である。

デリーロは、テキサス大学の Harry Ransom Center に収められた Personal Notebooks などにより、*Underworld* と *The Body Artist* (2001)の執筆時に、時間論、相対性理論、量子理論などを幅広く読みこなし、詳細な分析を行っていたことが明らかになった。とりわけ、量子理論が提示する素粒子の不可解な動態は、客観的な絶対空間絶対時間を前提とするニュートン力学の常識が、ミクロ的「現実」においては通用しないことを如実に物語っている。このことは、これまで普遍的とされてきた古典力学の「科学的」尺度が必ずしも精密ではなく、可視化されたマクロ的「現実」しか捉えていなかったことを意味する。

文学研究の立場から言えば、最先端物理学におけるこうした「現実」認識のパラダイム転換にこそ、文学との意外な接点を見出すことができる。というのも、「重ね合わせの原理」、「不確定性原理」、「量子もつれ」、「多世界解釈」、「トンネル効果」、「不連続な時間」といった、量子理論を特徴づける素粒子の戯れに満ちた振る舞いは、ポストモダン文学とすこぶる相性が良く、どこか既視感を伴うのである。あたかも量子力学がメタフィクショナル思考の枠組みを換骨奪胎したかのように見えるが、実際のところ、ようやく文学と科学がループをなして邂逅を果たし、新たな一步を共に踏み出すフェイズが開けたと言うべきだろう。

このような視座に立てば、後期デリーロ文学において、朦朧とした素粒子のスピンを彷彿させる謎の人物が登場したり、重ね合わせや宙吊り、時間が静止したかのような映画などが前景化されたりすることについても、腑に落ちる読みが可能となる。かくも捉え難く、変幻自在に変容し続ける極小フィールドは、作家の想像創造力(ポイエシス)が何かともつれるように跳躍しては異次元の別世界を現出し、詩的言語の肌理が生じる地平とも密かに繋がっている。本講演では、極小世界を探求し続けてきたデリーロが、彼自身の21世紀の「ワンダーランド」においていかなる言葉を紡ぎ、どのような世界観が立ち現れてきたのか、*The Body Artist*、*Cosmopolis* (2003)、*Point Omega* (2010)、*Zero K* (2016)、*The Silence* (2020)を中心に解き明してみたい。*Underworld*のテキスト空間にこだまする、かの有名なジングルに少し捻りを加えて言えば、「すべては量子論的(. . .)『関係性』によって繋がっている」のである。

アメリカとテクノロジー——アメリカ流線型時代の「人間」、「他者」、「テクノロジー」

今年2月23日、第44回日本SF大賞の受賞作に長谷敏司の小説『プロトコル・オブ・ヒューマニティ』が選ばれた。不慮のバイク事故で右足を失ったプロダンサーがAI共生型義足との新たな「プロトコル」（要は、「違和感」なく動かせること）を構築する物語である。他に目を向ければ、2022年の翻訳『サイボーグになる—テクノロジーと障害、わたしたちの不完全さについて』では、生まれながらに足に障害を持つキム・ウォニョンにとってそういった「プロトコル」はむしろ自分の「車いす」との間にある。このように、現代ロボティクスを待たずとも、今、「人間」は「マシーン」や「テクノロジー」とのつながり方、関係性、「プロトコル」を見出そうとするナラティブの只中にある。

しかし、「テクノロジー」はこれまでも「人間」とその政治社会、その倫理観に人知れず浸透し、影響を及ぼしてきたというポスト・ヒューマニズム的な指摘を忘れるべきではない。本シンポジウムでは、近代テクノロジー社会の象徴とも言えるアメリカの流線型時代（20年代～40年代まで）の「人間」の政治的「他者」、「ロボット」、「踊る女性身体」、「モンスター（類人猿+ゾンビ）」を軸に、当時の「人間」とその政治的「らしさ」のナラティブに潜む「テクノロジー」の影を追う。

ロボットは人間になる夢を見ることができるようになったのか？

——流線型時代の人間とロボットの「生殖」を軸とした境界線の政治的レトリックとその乗り越えについて

中村 嘉雄（九州大学）

20世紀アメリカSFにおいて、人間とロボットの存在論的な境界線のレトリックとして、子孫（遺伝的レプリカ）を産める人間と産めないロボットがしばしば登場する。この、人類を抹殺しかねないロボットの恐怖の—時的麻酔薬、人間優位を感じられる最後の砦のようなものに、どのような政治的、ヒューマニズム的なメッセージが込められているのか。本発表では20世紀アメリカSFの、人間とロボットとの「産む」ことを軸とした関係性、その政治性を検証し、時間が許せば、20世紀末の新たな両者の政治的可能性にも触れてみたい。

扱うSF作品としては、チャペック『R.U.R.』（1920）（ブロードウェイ公開1922年）、デル・レイ「いとしのヘレン」（1938）、ロバート・ワイズ監督映画『地球の静止する日』（1951）（リメイク2008）、エムシュウィラー「ベビィ」（1958）、アシモフ「バイセンテニアル・マン」（1976）、時間が許せば、映画『アンドリューNDR114』（1999）を予定している。

踊る帝国——バークレー、アール・デコ、メカニカル・ボディ

塚田 幸光（関西学院大学）

1930年代、恐慌時のミュージカル映画とは、現実逃避のエンターテイメントであり、プロパガンダである。それは同時代の欲望が投影されるスクリーンであり、だからこそ時代を越えて我々を魅了する。バズビー・バークレーのレビューは、そのような両義性を生み出す映像マジックと言うわけだ。本発表では、これらのコンテクストを踏まえながら、アール・デコとモンタージュという視点を導入する。都市の建築にアール・デコが溢れ、レビューで展開する機械的な身体（メカニカル・ボディ）とモンタージュは、如何にして交差し、同時代のイデオロギーを映し出すのだろうか。ニューディールのハリウッド、踊る帝国の政治美学（ポリティカル・アート）を見てみよう。

映してはいけない身体：1930年代のホラー映画におけるモンスター

福田 安佐子（国際ファッション専門職大学）

現代においても馴染みのあるヴァンパイアやフランケンシュタイン、そしてゾンビといったモンスターの多くは、1930年代前半に興ったホラー映画の流行によってより広く知られるものとなった。このブームの一端を担ったのは、大恐慌前の不穏な世間の雰囲気や、またはトーキー技術の出現などとされる。また、それらの映画の中での主役とも言えるモンスター達は、植民地主義や科学の進展によって新たに「発見」された未知のものや恐ろしいものへの、好奇心と脅威といった感情を反映している。例えば、1932年の映画『ホワイトゾンビ』は、ゾンビやヴードゥーの呪術師を「モンスター」として描きながらも、その恐怖の核となっているのは、植民地支配により引き起こされた異人種との文化や血の混交であった。このように同時代のモンスター達が覆い隠しているもの、その「おぞましき」を仮託された身体によって、映画にも映されることがなかった本当に「恐ろしいもの」とは何であったのかを考察することが、本発表の目的である。

ロボットになる猿——トレーニングされたゴリラとアメリカのマシン・エイジ

鈴木 章能（長崎大学）

映画 *King Kong* (1933) と *Mighty Joe Young* (1949) を時代区分としつつ、もっぱら 1930 年代に登場した文学作品、写真、映画など複数のメディア表象を事例として取り上げ、人間の機械化と文化表象の応答について考察する。

Frederick Lewis Allen は *Since Yesterday: The 1930s in America* (1939) で 1930 年代という時代のアイコンを *streamline* とみるが、その根幹にはテイラーイムズがある。ダーウィニズムによって人間と動物の境界が曖昧になった時代、テイラーは「トレーニングされたゴリラ」こそが社会の役に立てる立派な労働者と考えた。それはやがて人間機械論や流線型思想などと結びつく。金がないからこそ効率的生産性が重んじられた 1930 年代、「トレーニングされていないゴリラ」と「トレーニングされた人間」は立派な機械になれず、社会的排除の対象か教育の対象となる。この文脈において、女性はオートマタとなることで、トレーニングされたゴリラと同じ位置に据えられる。こうした状況は 1940 年代も続く。当時のソビエトもテイラーイムズにはそれほど否定的でなく、その意味でゴリラと機械へのまなざしには政治的な右も左もない。こうした文脈において、“Shot by the ‘Monster’ of His Own Creation” (1932)、“Robot Alpha” (1934)、アメリカ左翼系児童文学“The Teacup Whale” (1934) といった物語ほかを取り上げ、その表象を検討してみたい。